



TITLE:

マルクスの唯物史観に関する一考察

AUTHOR(S):

河上, 肇

CITATION:

河上, 肇. マルクスの唯物史観に関する一考察. 経済論叢 1919, 9(4): 475-489

ISSUE DATE:

1919-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/127584>

RIGHT:

經濟論叢

第九卷 第四號 (通卷第五十二號)

大正八年十月發行

論 說

マルクスの唯物史觀に關する一考察

(マルクスの社會主義は唯物史觀てふ必然論を根據とするの故を以て非難せらるれど、個人主義經濟學の創設者乃至完成者と看做すべきアダム・スミス及びマルサス等も、亦共に等しく必然論の上に立脚せるものなることを、明かにする爲の一論)

河 上 肇

一、マルクスの唯物史觀に對する通俗の非難

マルクスの科學的社會主義の根柢は唯物史觀にある。而してその唯物史觀なるものは、余の見
る所に依れば、元來一種の必然論である。マルクスの親友にして且彼の思想の祖述者たるエンゲ
ルスは其初期の作物に於て、『一定の數學上の方式から一の新たなる方式が演繹さるゝと同様の

論 說 マルクスの唯物史觀に關する一考察

第九卷 (第四號) 一 四七五

(1) Rheinische Jahrbücher zur gesellschaftlichen Reform, vol. I. (1845), pp. 78, 79. Simkhovitch, Marxism versus Socialism, p. 45. に引用する所

確さを以て、吾々は現在の社會事情及び經濟學の原則より社會的革命（資本主義の瓦解に伴ふ社會主義の實現を意味す）を演繹し得る」と言つて居ると云ふ事であるが、マルクスにしろエンゲルスにしろ、彼等は晩年に至るまで、大體斯かる思想を維持したりと見て、敢て差支は無い。

マルクスは歴史の進行に關し、一の自然科學的の因果法則を發見した人である。而して吾々は、其因果法則を名けて、マルクスの唯物史觀と謂ふのである。彼の見る所に依れば、一定の社會組織が社會の生産力の發展を束縛することに爲れば（原因）、其社會組織は早かれ晚かれ、或は急激に或は徐々に、必然的に崩壊して、新たな社會組織が之に代ることゝ爲る（結果）。之は一個の自然科學的なる因果の法則である。然るに現代の社會組織たる資本主義は、最初の間こそ社會の生産力の發展を助長したれ、其生産力が已に或程度までの發展を爲したる後は、同じ資本主義の組織が却て社會の生産力のそれ以上の發展を束縛するに至るものである。故に資本主義の組織は早晚必然的に崩壊して、社會主義の組織之に代るに至るべしと云ふので、畢竟社會主義の實現は、マルクスにとつては、一個必然の運命に外ならぬのである。是れ余が、マルクスの社會主義論を以て、一種の必然論なりと謂ふ所以である。

然るに此必然論に對しては、多くの非難がある。就中、其の最も普通に於て且容易に人の賛成を得るものは、マルクスの思想は其必然論の爲め當然無爲拱手論に終るべきであるといふ非難で

ある。社會主義の實現が必然の運命であるならば、吾々は只手を拱き爲すことも無くして、單に其必然の到來を俟つより外には無い。然るにマルクス及び彼の思想を奉ずる人々が、熱心に社會運動の爲め奔走し又奔走せんとしつゝあるは、何故であるか。其は明かに一個の自家撞着では無い。之が其非難の要領である。

然るに私の見る所に依れば、此非難ほど無意味のものは無い。例へば茲に醫學者が居て、母胎に産兒の宿り居るを診察し、早晩出産のことあるを豫言したりとせんに、吾々は其必然論を聞き、早晩來るべき出産時に於ける各種の準備に心をこそ配れ、決して無爲拱手に終るべき筈は無い。又例へば一の醫學者ありて、人は早かれ晩かれ死を免れざるの必然的運命を有す、と斷言したりとするも、自らの死を急ぐ者は依然として自殺すべく、又他人の死を希望する者も依然として謀殺を企つる筈にて、假ひ死は必然なりと論證されたりとするも、人は是が爲め決して死に對し無爲拱手に終るべき筈は無い。必然論に對する無爲論の無意味なることは、此等の例に依つても略ぼ推察し得らるゝと思ふが、併し余は茲に、斯かる事を議論せんとする者では無い。余が本論に於て明かにせんとする所は、社會主義經濟學と正に對立すべき正統派の個人主義經濟學も亦、マルクスの社會主義と同様に、一種の必然論の上に其根據を有す、と云ふ事である。

二、アダム・スミスの必然論

ハリスンの近著『社會に就て』*の中には、Every religion has its doctrine about human nature (この宗教は人間性に就て其れ——の教理を有つ)とあるが、余の見る所に依れば、社會現象に關し自然科學的研究を施せる學問も亦、總て人間性 (human nature) に關し一定の前提を有するものである。人間性に關し一定の前提を作り、之を以て動かすべからざるものと爲すことに依り、社會を組織せる人間をば fixed and constant (固定且恒常) のものと爲すが故に、始めて斯くすれば斯くなると云ふ因果的法則が成立ち、其研究が自然科學的の學問たる面目を具へ得る。第十八世紀の末葉に當り、アダム・スミスが、從來の時事問題に關する片々たる且雜然たる論議を統一し、始めて一個獨立の科學たる面目を有する我が經濟學を創立し、個人主義經濟學の初祖たることを得たる所以も亦、彼が人間性に就て一定の判斷を下し、之を出發點として其理論を演繹することに依り、經濟現象の進行を因果的に説明せんと爲したるが爲に外ならぬ。

後に述ぶるが如く、マルクスの必然論は人間性に關する一種の獨斷を前提とすることに依りて始めて成立するものなるが、之と同様に、スミスの經濟論も亦人間性に關し或種の獨斷を立て、之を前提として組立てられたるものである。然らばスミスは人間性を如何なるものと立てたるか

* Frederick Harrison, On Society, 1918, p. 9.

と云ふに、人間の特徵は常に自己の利益を計らんとするにあると云ふが、前後を通じての彼の見解である。彼は或場合には此性情を名けて『自愛心』⁽¹⁾と謂ひ、或場合には『利己心』⁽²⁾と謂ひ、又或場合には之を『自己の生活状態を改善せんとする各個人の自然的努力』⁽³⁾とも謂つて居る。人間といふものは利己的のものであると云ふ認識、之がスミスの思想の根柢に横はる考なのである。彼は其事自身に就ては、之を善いとも悪いとも言つては居ない。只事實として、人間は利己的のものであると云ふ判断、之が彼の議論の前提である。猶ほ其事に就ては、彼は別に何等の論證を爲し居らざるが故に、余は之を以てスミスの議論の前提となれる一種の獨斷だと言ふのである。

スミスは此の如き獨斷の下に資本主義の經濟組織を観察した。而して彼の觀察に従へば、總じて利己的の性情を有する人間をば、資本主義といふ經濟組織の下に放任して置くならば、彼等は期せずして、自然的に又は必然的に、社會の生産力を最大限度に發展せしむるものである、と云ふのである。

例へば、一國の資本が各種の事業に向つて分配せらるゝ所以に就き、彼は其著『諸國民の富』第四篇、第七章、第三部に於て、次の如く述べて居る。

『此の如く、各個人の利己心は、自然的に彼等をして、其資本をば、普通の場合には、社會の爲め最も利益ある方面に向つて放下せしむるに至るものである。なほ此の自然の選擇に本き、若

(1) "self-love"—Wealth of Nations (Cannan's ed.), vol. I. p. 16.

(2) "private interest and passions".—*Ibid.*, vol. II. p. 129.

(3) "natural effort of every individual to better his own condition".—*Ibid.*, vol. II. p. 43. p. 172.

し或事業にのみ餘りに多くの資本を放下するが如きことあらんか、其場合には、其等の事業の利潤は減少し、其他の事業の利潤増加することゝ爲るべきが故に、彼等は直ちに此の誤りたる分配を訂正することゝ爲る。されば何等法律の干涉なくとも、人々の利己心は、自然的に彼等を導きて、各社會の資本をば、其社會内に於て行はるゝ所の各種の事業に向つて、凡て都合よく分割配分せしめ、其割合をして出來得る限り、社會全體の利益に最も善く適合せしむるに至るものである⁽¹⁾。

又同書第四篇、第二章にも、同様の意見が繰り返し力強く説かれてある。

『一大社會に於て絶えず使用され得る労働者の數は、其國全體の資本と一定の比例を保つべきものにて、決して其比例を超過すること能はざるものである。如何なる法律制度を以てするも、一定の社會に於ける産業の分量をば、其資本が支持し得る程度以上に増加することは、不可能である。そは只資本の一部をば、若し之を放任し置かば、到底さる方面に使用されざるべき方向に轉せしむるだけの事である。而かも此の如き人爲的支配をなすことが、之を其のまゝに放任し置く場合に比し、社會にとり利益多かるべしとは、全然考へ得られぬことである。

各個人は其の支配せる資本に就き最も利益ある使用法を發見せんが爲に、絶えず活動して居る。彼の眼中に在るものは、實に彼自身の利益にして、社會の利益では無い。併し彼自身の利

(1) Wealth of Nations, (Cannan's ed.), vol. II. p. 129.

益を攻究するの結果は、自然的に、或は寧ろ必然的に、彼をして社會の爲め最も利益ある使用法を選ぶに至らしむるものである。

……内國産業の爲に其資本を使用する者は、何人と雖も必然的に、其生産物が出來得る限り最大の價值あるものたらしむやうに、其産業を指導せんと努むるものである。……蓋し其生産物の價值の大小に比例して、事業主の利潤も亦或は大となり或は小となるべきであるが、今如何なる人も、産業の爲に資本を投ずるは、只利潤を得んが爲である。されば、彼は常に其資本をば、其生産物が最大の價值を有するが如き産業、言ひ換ふれば、其生産物が貨幣又は其他の財の最大の分量と交換され得る如き産業の爲に、之を投すべきである。

然るところ、各社會の年々の所得は、其社會の産業の年々の生産物全體の交換價值と常に全く相等しく、否な寧ろ其交換價值と全然同一物である。されば、各個人は其資本をば出來得る限り國內産業の爲に使用し、かくて此等産業の生産物をして最大の價值を有するものたらしむるやう努力するに於ては、各個人は必然的に彼の能ふ限りに於て、其社會の年々の所得を最大ならしむるやう努力しつゝある譯である⁽²⁾。

スミスの見る所に依れば、人間は利己的のものである。故に各個人は、若し之を自然のまゝに放任するならば、其資本をば、各個人の立場より見て、最も生産的に之を利用すべきである。然

(2) *Ibid*, vol. I. pp. 419, 420.

るに、各個人の資本が其人々の立場より見て最も生産的に利用せらるゝならば、其等各個人の資本を合計したるものより成る所の社會全體の資本も亦、同時に最も生産的に利用せらるゝ筈である。彼は此の如くに觀察した。それ故、彼の見他よりすれば、各事業家をば彼等の爲さんとする所に放任し置くならば、自然的に又は必然的に、社會の生産力は最大限度の發展を爲すに至るものである、といふ必然論が出て來るのである。而して此必然論——科學上の確信——あればこそ、各個人をば其の爲すがまゝに放任し置くべしといふ所謂個人主義的放任論——スミスの所謂『自然的自由』の制度の主張——が、其政策論として出て來るのである。彼曰く

『されば保護又は干涉の凡ての制度をば全然取り去り、かくて自然的自由といふ明白にして且簡單なる制度をして自然に樹立する所あらしめよ。此制度の下に於ては、各個人は、其者が正義の法を犯さざる限り、自己の欲するがまゝに己れ自身の利益を追求し、かくて他の何人の事業及び資本たるを問はず、自己の事業及び資本を以て之を競争することに就き、全然其自由に放任せらるゝであらう。云々』

此の如くにしてアダム・スミスの必然論は、果して自由放任主義を生むに至つた。而して自由放任といふ立言の方面より見るならば、それは明かに一種の拱手無爲論である。乍併、茲に余が諸君の注意を惹かんとするは、此の如く一の方面より見れば、全然拱手無爲論に終るが如き彼の政

策論は、正に是が爲めに、他の方面より見れば、保護干渉に對する有力なる反對論を生むの論理的必然性を有すと云ふことである。現にアダム・スミスは、彼が見て以て無用有害なりと爲せし一切の保護干渉に對し、極めて熱心なる反對を爲せしものにて、當時彼の意見が如何に實際上の改革に影響する所ありしやは、茲に絮説を要せざる所である。

必然論は論理上放任論を生むこととなり、且放任論は即ち無爲拱手論なるが故に、そは人をして無目的の盲目的の惰眠を食らしむるの外なきものと爲すの論者は、——一種の必然論たる唯物史觀の上に立脚せるマルクスの社會主義に對し、今日斯かる種類の非難を爲すもの多し、——宜しくアダム・スミスの必然論及び放任論が、思想界及び實際界に如何なる偉大の影響を及ぼせしやを回顧すべきである。英國に於ける穀物條例の廢止は、自由放任主義實現の最後の幕と見るべきであるが、當時此問題の爲め東奔西走して献身的努力を敢てせしコブデン、ブライト等の政治家は、正に放任主義の信徒に外ならざりしものである。此一例を以て見るも、必然論に本く放任論が、實際運動の上に如何に強烈なる熱力を與ふるものなるかを推知すべきである。

三、マルサスの必然論

マルサスはスミスの後に出で、主として分配論の方面に於て、個人主義經濟學の完成に貢獻し

たる學者である。然るにこのマルサスも亦スミスと同様に、一種の必然論の上に其政策論を樹立し居ることは、余の頗る興味ありとする所である。

マルサスの有名なる人口論は、第一版と第二版以下とにては、大に其議論の内容を異にして居る。乍併、彼の人口論が一種の必然論の上に立脚せることは、前後を通じて略ぼ同じである。

人口論第一版を見るに、マルサスは、人口問題を論ずるに當り吾々は先づ二の前提(postulates)を作り得ると稱して、次の如く述べて居る。

『第一は、食物は人の生存に必要なりと云ふことであり、第二は、両性間の情慾は必要にして且略ぼ其現狀を維持すべしと云ふことである。』

『此等二個の法則は、人類の歴史あつてこのかた、常に吾々の天性に關する固定の法則なりしが如く見ゆる。而して吾々は、今日まで、此等の法則の上に何等の變化を見ざるが故に、將來に於ても、此等の法則が今日在るがまゝのもので無くなるであらうと云ふことをば、……斷言する權利を有たぬものである。』

なほマルサスの見る所に依れば『人口の増加力は、土地が生活資料(食物)を生産する力よりも、遙に大なるものである。』而かも『食物は人の生存に必要』缺ぐべからざるものである。故に『人口の繁殖力と土地の生産とが自然的に不平等であると云ふこと』、及び吾々の天性に關する法則と

* Malthus, On the Principle of Population, 1 st ed., p. II. et seq.

の爲に、此等二個の力は、結果に於て、絶えず平等に保たねばならぬ。即ち『人口の優れる力は貧窮及び罪惡に依つて抑制せられ、之に依つて現實の人口は始めて生活資料と平均を保つ』の外なきものであるが、此事は『社會完成の途上に横はる大困難にして到底打ち勝つべからざるもの』である。蓋し食物不足の結果として生ずる所の人口増加の妨げは、必然的に貧窮又は罪惡を生むに至るものにて、吾人は斯かる運命より『人間の遁れ出づべき道あるを知らぬ』。『されば、社會の各員總てが、安易に、幸福に、且比較的閑暇に生活し、而して彼等自身及び其家族に向つて、生活資料を供給することに就き、何等の心配を感ぜざるが如き社會が成立し得ると云ふことは、到底望なきこと、考へられる』が爲である。

以上がマルサス人口論第一版の要旨であるが、之に依つて見れば、彼の人口論も亦、明かに一種の必然論の上に立脚せるものにて、且其必然論は、矢張り人間性(human nature)に關する一種の獨斷を前提とすることに依つて、始めて成立てるものである。彼は、人間の生存には食物を必要とすと云ふこと、人間の性慾は力強きものなりと云ふこと、を以て、fixed laws of our nature (吾々の天性に關する固定の法則)となし、之を以て議論の postulates (前提)となせるものなるが、此點は、前に述べたるスミスが、利己的なることを以て吾々の天性なりと前提したると、其趣が全く同じである。何れも之を一の公理として前提せるのみにて、之に對し何等の論證を加

へ居らざるが故に、それは一種の獨斷に外ならぬ。而かも此前提を動かすべからざるものとして、之より一切の議論を演繹せるが故に、其結論は人間社會に關する一の必然論たらざるを得ぬのである。即ちマルサスに在つては、貧窮及び罪惡は人間の到底遁る能はざる宿命なりと云ふ必然論が出て來るのである。然るに必然論は常に放任論を生む。故に貧困者の救済に就ては、マルサスは絶對の放任論を主張したものである。而して既に放任論を是と爲せしが故に、彼は一切の慈善的救済に對し極力之を非難したものである。げに必然論は果して放任論を生むに至るものなれども、而かも一定の放任論は一定の反對論に猛烈なる熱を加ふるものである。

マルサスの人口論は、第二版以後、人口増口の妨げとして貧窮^う及び罪惡の外に、別に道德的抑制なるものを認むるに至りし點に於て、大に其議論の趣を變化して居る。乍併、彼はその所謂道德的抑制——「結婚を抑制し、而かも不正常なる情慾の満足を伴はざるもの」*又は「吾々が家族を養ひ得る状態に達するまで結婚を制し、而かも其期間完全に道德的行爲を守ること」**——を以て、全く個人の自制に俟つべきものと爲し、國家の權力に依り個人の結婚に干涉することを否認せしが故に、その政策は依然として個人主義、放任主義に外ならざりしものである。試に彼の所論の一節を引用せんに、彼は人口論第二版以下に於て次の如く述べて居る。

『若し何人かゞ、家族を支持し得るの見込なきに拘らず、結婚せんことを欲するならば、其者

* On the Principle of Population. Ward 4 Lock Co.'s ed., p. 9.

** *Ibid.*, p. 456.

は爾か爲すことに就き最も完全なる自由を有するであらう。尤も此の如き場合に結婚するは、余の考に依れば明かに一の不道德なる行爲なれども、而かも社會が自ら之を豫防し又は所罰せんとするは不當である。何故とならば、……。されば彼は自然の刑罰たる甚しき缺乏に只放任し置くべきである。……公の救助は彼に向つて最も手厳しく拒まるべく、又私人が慈善として彼を助くるにしても、人類全體の利益は、そが極めて控目に行はるべきことを、是非に要求する^{*}。』

げに必然論は放任論を生む。而も放任論に確信を有せしが故に、マルサスは公私一切の慈善的救済に反對すること此の如く大膽なるを得たのである。

之を要するに、先づ生産論の方面に於て個人主義の主張を建設せしミスも、又分配の方面に於て個人主義の主張を補足せしマルサスも、共に人間性に關する獨斷を前提とせる一種の必然論の上に立脚しつゝある者である。然るに世の經濟學者、必然論に立脚せるの故を以て獨りマルクスをのみ責むるは、何故であるか。是れ吾輩の理解するを得ざる所である。

四、マルクスの必然論

余の見る所に依れば、マルクスの社會主義の根柢と爲れる唯物史觀は、明かに一種の必然論で

* *Ibid.*, pp. 486, 487. (人口論第二版原本, pp. 539, 540.)

あるが、其必然論には、實は之が前提として、矢張り人間性に關する一定の獨斷があると思ふ。勿論其前提は明示されて居ないが、吾々は彼の所論より斯かる前提の暗に包藏されあることを推定せんとするものである。

既に述べたる如く、マルクスの主張する所に依れば、一定の社會組織は、『總ての生産力が其組織内に於て餘地ある限り其發展を爲し遂げたる後に非ざれば、決して顛覆し去るものではない』^{*}が、之と同時に、其社會組織が社會の生産力の發展を束縛することに爲れば、それは早かれ晚かれ、必然的に崩壊して、新たなる、より高度なる社會組織が之に代ることゝ爲るものである。之が唯物史観の中心を爲せる社會組織進化論の要旨であるが、余の考ふる所に依れば、此等の議論の底には、如何にしても人間性に關する一の獨斷が横はつて居ると見ざるを得ぬのである。蓋し一定の社會組織が社會の生産力の發展を束縛することに爲れば、其社會組織は早晚必然的に崩壊すると云ふのが、マルクスの意見であるけれども、元來社會組織なるものは吾々個々の人間が相集つて組成し居るもの故、社會組織の變動は、海嘯の爲め家が流れたり、噴火の爲め新たに山が出来るなど、云ふ自然界の現象と異り、其建設も其破壊も共に人間の力、人間の行爲に依つて始めて行はるべきである。其社會組織内に包含せられ居る所の少くとも若干の人々が主動者となりて、舊組織の破壊並に新組織の建設を企てざる以上、社會組織が只自然に變動すると云ふことは無い。

* Marx, Zuz. Kritik der politischen Oekonomie, Vorwort.

されば、一定の社會組織が社會の生産力の發展を束縛することになれば、其社會組織は早晩必然的に崩壊するものである、と云ふ立言の中には、社會組織による生産力の人爲的束縛は、必然的に其組織内に包含せらるゝ若十の人々に刺戟を與へて、社會組織改造の運動を起すに至らしむるものなり、と云ふ思想が、隱に包藏せられて居る譯である。言ひ換ふれば、吾々は、社會組織による生産力の人爲的束縛をば到底長きに亘りて耐へ得ざる性質を有するものにて、從て已に社會組織による生産力の人爲的束縛あるに至らば、吾々は早晩必然的に其社會組織を破壊して、之に代ふるに新たなる、より高度の社會組織を以てするに至るものなり、と云ふ人間性(human nature)に關する一種の獨斷が、唯物史觀に缺ぐべからざる前提と爲つて居ると思ふ。

余は今茲に、此前提の是非を議論しやうとする者では無い。乍併、此前提に一應の道理あることを簡單に説明し置くは、必ずしも無用ではあるまいと思ふ。蓋し人間は到底不可能と信ずることに向つては、決して不平を抱くものではない。現に吾々は、月の世界に住居することも、星の世界を見舞ふことも出來ぬけれども、斯かる事は人間として元來不可能なりと信じ居るが故に、吾々は曾て之を不服に思つたことは無い。其と同様に、社會の生産力が猶ほ幼稚にして、到底十分なる物資を生産し能はざる時代に於ては、社會の大多數の者が假ひ極度の貧困状態に在るとも、彼等は決して之を不平に思ふものではない。如何に社會の組織を變更すとも、本來幼稚なる人間